

19世紀カナダにおけるカントリータウンの計画と展開

—アッパーカナダのエローラ村を事例として—

谷口美都子

I 視角と目的	ラ村の計画
II カントリータウンの計画	III カントリータウンの展開：1840～70年
(1) アッパーカナダの開拓とタウンシップ計画	代
(2) アッパーカナダのタウン・プランニング	(1) カナダと周辺タウンシップの状況
(3) ニコルタウンシップの開拓とエロー	(2) 企業家の定着と産業の発展
	(3) 人口の動向と市街地計画の展開
	IV 19世紀カントリータウンの評価

キーワード：カントリータウン，アッパーカナダ，エローラ村，タウンシップ計画，タウン・プランニング

I 視角と目的

田園的居住環境「カントリーサイド」に点在する小集落である「カントリータウン」¹⁾は、分散的な都市的環境としても注目される。アメリカ合衆国，カナダ，オーストラリアにおけるカントリータウンの多くは，その開拓史の中で農業開拓の中心地としての伝統をもっている。ここでとりあげるカントリータウンは，開拓が進むにつれて自然発生的にできた集落に先立つもので，開拓拠点として意図的に計画され，特定の機能を念頭においてつくられたものである。集落機能の変化を経た結果，現在の機能は郊外住宅地と同じく居住機能に特化している集落も多いが，その成立起源は開拓史の中に位置付けられ，現在の人口増加の要因もその歴史過程と

環境に負うところが大きい。このことについては，1941年以降のカントリータウンの動向という形で以前にとりあげた。小稿では19世紀に焦点をあて，カントリータウンを誰がどのような計画をもって実際の開発を進めていったのか，またその後はどのように地域がつくりあげられていったのか，という地域形成過程の観点から検討する。そしてカントリータウン形成の過程が，19世紀のカナダにおける開拓と国家形成にどのようにかかわっていたのか，という観点における位置付けを試みたい。

対象地域であるアッパーカナダ(Upper Canada)は，イギリス植民地時代の呼称であり，現在のオンタリオ州南部地域＝南オンタリオにあたる。現在の南オンタリオは，オンタリオ湖岸にトロントをはじめとして多くの都市をもつ

1) 主として農牧業地帯であるカントリーサイドの中心集落の呼称には，カントリータウン(country town)，中心町(rural center, service town)，小集落(small town)などがある。(金田章裕「クイーンズランド南部農牧業地帯における地域構造の変化」，追手門大学オーストラリア研究紀要17, 1991, 195-220頁。)ここではカントリーサイド環境を重視し，また集落機能の歴史の変遷があることを考え，カントリータウンという呼称を用いる。

2) 拙稿「カントリータウンを中心とする空間—カナダ南オンタリオを事例として—」，人文地理48-3, 1996, 77-92頁。

カナダで最大の都市化地域であり、かつ内陸部は混合農業がさかんなカナダで最も肥沃な農業地域でもあり、カナダの心臓部＝ハートランドとよばれる。エローラ村 (Elora Village) は、この地域のほぼ中央部に位置するウエリントン郡 (Wellington County) の中にあり、現在の人口は3,000人程度の中規模のカントリータウンである。

開拓時代のカナダ獲得をめぐる英仏戦争は、1763年のパリ条約で終結した。そして、フランスが北アメリカ大陸の北半分で獲得していた植民地 (ヌーヴェル・フランス) は、ケベック植民地と改称され、同年の国王宣言でイギリスの植民地となった。³⁾ アッパーカナダもこのケベック植民地に含まれる。イギリス政府は、イギリス軍とアメリカからのケベック植民地への移民に期待したが、実際の大規模な移民がやって来るのは、アメリカ合衆国独立戦争時からであった。アメリカ独立戦争は、イギリス領植民地が長年待望していた大規模なアメリカ移民の流入をひきおこした。1780年代から植民地政府は、セントローレンス川沿いやオンタリオ湖沿いから測量を始め入植を推進し、また開拓拠点としてのタウン・プランニング (town planning) にも力をいれた。当初は必ずしも期待どおりには進まなかったが、徐々に開拓者も増え、1820年代以降、開拓の範囲も川岸や湖岸から内陸部へと広がりを見せていった。

そこで、アッパーカナダの開拓が本格化する1830年代から開拓が始まったエローラ村を事例に、19世紀のアッパーカナダのカントリータウンの選定・開発計画の内容と実際の計画実施の過程、計画の実現や実際の開拓との隔たりなどを検討したい。エローラ村の位置や開拓開始時期、またその現在の集落規模やその機能は、19

世紀のアッパーカナダのカントリータウンの開拓の一典型を表すもの考えられるからである。第Ⅱ章では、アメリカ合衆国独立戦争後のアッパーカナダの開拓計画を概観した上で、具体的なエローラ村の計画のプロセスを検討する。どのような考えのもとでアッパーカナダの土地開拓が行われたのか、また開拓の拠点としてどのような町が計画されたのかについて検討する。そして1830年代から開発が始まったエローラ村と、開拓当初エローラ村を包括していたニコルタウンシップ (Nichol Township) の開拓について、開拓者の計画に注目をする。第Ⅲ章では、1840～70年代にかけてのアッパーカナダと周辺タウンシップの状況を概観し、エローラ村の展開を検討する。最初の開拓者である起業家の死去後、別の企業家が登場して産業を興し、それが発達して行く過程や、それに伴う人口の動向、商工業地区の展開や住宅地の開発状況をみていき、コミュニティの形成過程を明らかにする。最後に第Ⅳ章では、その後のカントリータウンの展開をふまえてその特徴をまとめ、19世紀のカナダ開拓史におけるその位置付けを試みたい。

Ⅱ カントリータウンの計画

(1) アッパーカナダの開拓とタウンシップ計画 アッパーカナダの開発は、1775年に始まったアメリカ合衆国独立戦争後、それまでの居住地を追われた王党派の移住に始まった。⁴⁾ イギリス植民地政府は、そのための多額の資金を提供し、ケベック植民地には1万人あまりが移住した。やがて王党派の到来は植民地の再分割を促し、ケベック植民地は、1791年にオタワ川を境界としてアッパーカナダ (現オンタリオ州) とローワーカナダ (Lower Canada: 現ケベック州) に

3) 木村和男, フィリップ・バックナー, ノーマン・ヒルマー『カナダの歴史—大英帝国の忠誠な長女1713-1982—』, 刀水書房, 1997, 30-35頁。

4) 前掲3) 41-48頁。

分割される。ローワーカナダはフランス系カトリック住民が多数派を構成していたが、一方のアッパーカナダは先住民たちの居住領域がいくつか存在するものの、イギリス領北アメリカ植民地の中では人口希薄な地域であった。当時のアッパーカナダは森林が続くフロンティアであり、広葉樹林におおわれた湿地や湖、小川を含む土地は開拓し易くはなかったが、農業に適した肥沃なものであった。植民地政府は、この土地を先住民から安く買いあげ、植民地の行政官による系統立てた測量を行い、入植者に下付した。その測量の基本単位となったのがタウンシップ(township)である。

1783年に最初のタウンシップの測量命令が出された。タウンシップの大きさとデザインを統一する試みは、1789年にカナダ総督のドーチェスター(Dorchester)卿によって行われた。⁵⁾10マイル四方(260 km²)のタウンシップを設定し、その内部に農地区画、町区画をもつ町立て地、⁶⁾町立て地の周囲にある軍事用保留地、公園区画を配置した。しかし、1792年にアッパーカナダ初代準総督になったシムコ(John Graves Simcoe)卿は、このタウンシップ計画を放棄した。シムコ準総督は、アメリカ合衆国に対する防衛の強化と農業や交易による経済発展のために、⁷⁾道路を建設し入植者の拡大をはかることを最重視した。そして、オンタリオ湖とエリー湖の湖岸線を基線とする縦横の道路(コンセッション

(concession)とサイドロード(side road))をひき、⁸⁾タウンシップを設定した。タウンシップ内の方格状の小区画は、タウンシップ名・コンセッション番号・区画番号の組み合わせで表された。測量の原則は地域全体から小さい部分へ、すなわち、郡→タウンシップ→コンセッション→小区画、と進むのが基本である。しかしアッパーカナダでは、タウンシップの測量から行われたため、タウンシップ内では規則的な農地区画がみられるが、アッパーカナダ全体のタウンシップの形態と配置は不規則なものとなった。

またタウンシップの測量システムも、大きく「シングルフロント」⁹⁾(1783—1818年)から「ダブルフロント」¹⁰⁾(1818—1829年)、「2400エーカーセクション」¹¹⁾(1829—1851年)へと改良され、19世紀中頃までに500以上のタウンシップが設定された。これらのタウンシップの開拓は、セントローレンス川上流へ、またオンタリオ湖岸やエリー湖岸からそれらの北側へ広がっていった。農地開発は、南東部オンタリオから南オンタリオの北西に向かって、10年で70マイル進み、約100年かけて入植が進んだ¹²⁾(第1図)。そして次第に、王党派でないアメリカ合衆国からの入植も奨励された。1815年には8～10万人がアッパーカナダに居住していたが、その多くは1790年以後の合衆国からの移民とその子孫であった。1812年に第2次英米戦争が勃発したが、この戦争後はアイルランドからの移住者も多く流入し

5) Gentilcore, R. L. and Head, C. G., *Ontario's History in Maps*, University of Toronto Press, 1984, pp. 89-91.

6) 「町立て地」(town site)とは、将来に町を建設すべき場所として確保されている用地である。

7) Spelt, J., *The Urban Development in South-Central Ontario*, Van Gorcum & Comp., 1955, pp. 11-31.

8) McIlwraith, T. F., *Looking for Old Ontario*, University of Toronto Press, 1997, pp. 50-66.

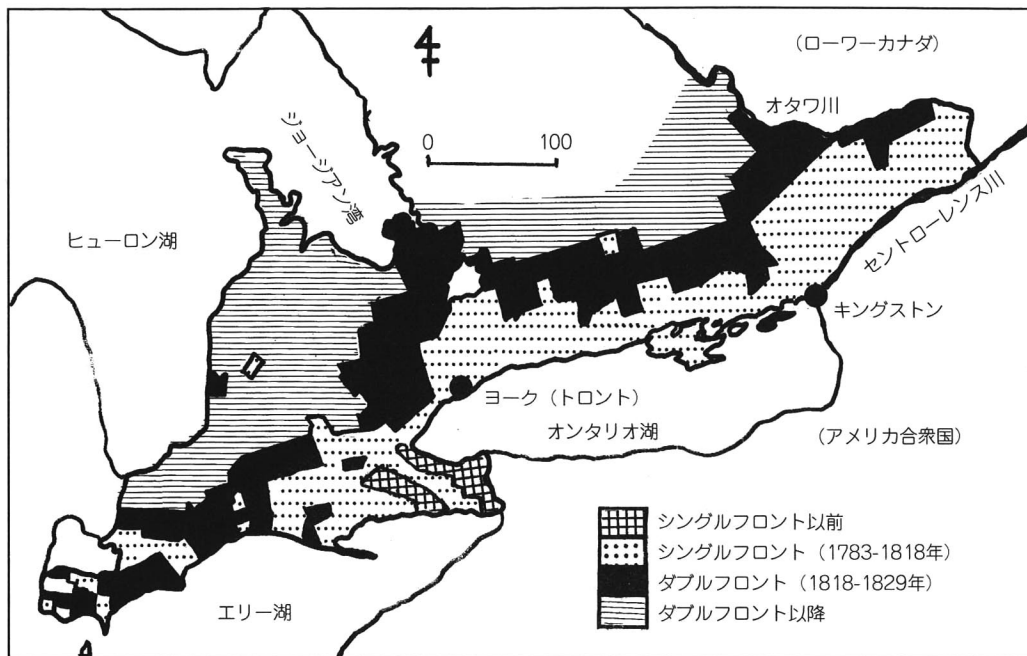
9) 各コンセッションから一方向に垂直な線を引き、区画をつくる。各区画の前面がコンセッションラインに面する。各区画は、19チェーン×105.27チェーン(1チェーン≒30.5メートル)の縦長の200エーカーが標準。約150のタウンシップが、この測量システムを採用。

10) 各コンセッションから二方向に垂直な線を引き、区画をつくる。各区画の二面がコンセッションラインに面する。各区画は、30チェーン×66.67チェーンの200エーカーが標準で、通常100エーカーずつの2つの区画にわけられる。100以上のタウンシップが、この測量システムを採用。

11) ダブルフロントシステムの変形。12の200エーカー区画(30チェーン×66.67チェーン)から構成される中區画が、縦横道路によって明確に示される。

12) 前掲5)。

13) Waterston, E. and Hoffman, D., *On Middle Ground: Landscape and Life in Wellington County 1841-1891*, University of Guelph, 1974, pp. 30-37.



第1図 アッパーカナダの位置とタウンシップ測量システム

資料：タウンシップ測量システムについては、McIlwraith, T. F., *Looking for Old Ontario*, University of Toronto Press, 1997, pp. 57 Figure 4.6による。

¹⁴⁾ た。

(2) アッパーカナダのタウン・プランニング
アッパーカナダの開拓において、開拓拠点としての町、また将来の農業地帯のサービスセンターとしての町、をつくることにも力が入られた。ドーチェスター総督の計画では、「各タウンシップは最も便利な場所に1マイル四方の町立て地を含む」とされた。¹⁵⁾ 町立て地には共有地が含まれ、教会・学校・中央広場・市場のための区画も用意された。しかしこの構想は地図上だけのもので、当時の居住地のほとんどが農業集落であり、行政上の計画と居住地の現実には大きな隔たりがあった。唯一の都市的集落である町は、軍駐屯地に隣接する町として1784年に測量・計画されたキングストン (Kingston) で

¹⁶⁾ あった。そして1794年には、「各タウンシップが町立て地を含む」というドーチェスター総督の計画は放棄され、シムコ準総督は新たな計画を考えた。彼は「タウンシップの中の町」にこだわらず、川の合流点や港、水路の発着地など自然の利点をもっている場所を選ぶことが、タウン・プランニングに重要なことだと考えた。交通の結接点を重視し、道路建設にも力を入れ、それに見合う産業を興そうとしたのである。このような彼の考えに基づいていくつかのタウン・プランニングが成立したが、最大の成功例が新しい首都ヨーク (York: 現トロント) である。シムコ準総督は、ジョージアン湾とオンタリオ湖を結ぶ道路を建設し、オンタリオ湖北岸の発展に特に力を入れた。

14) 前掲3) 55-56頁。

15) 前掲5)。

16) 前掲7)。

18世紀末のアップーカナダでは、人口450人のキングストンが最大の町で、ヨークより西の地域は先住民の居住地であった。1790年代の植民地政府下の居住地は川や湖沿いのみであったが、次第に道路建設が進んでいった。そして、1800～1820年の間に先住民からの土地買得が進展して、アップーカナダ政府の所有地が拡大した。政府から入植者への土地の下付は、最初はシムコ準総督の政策で最大200エーカーとされた。また下付の条件として、「1カ月以内に家を建て、その前の道路を整備し、道路に面する10エーカーを開拓する」ことが課された。これは、実際に開拓をして定住する入植者を奨励するための政策であった。しかしこの条件は、結婚や相続の問題から例外が認められたり、金に困った退役軍人が土地を売ったり、規定の抜け道を利用する人も多くなり、有名無実化していった。その結果、特定の役人や投機家に土地がわたるようになり、シムコ準総督の土地販売政策は廃止され、タウンシップの大部分が投機目的の不在地主に所有される所もでてきた。土地開拓やその販売を専門に行う企業や個人がでて、次第に土地開発は政府主導から商業的投機も伴う私的なものへと変わっていった。

このことを背景に、タウン・プランニングを行う主体も政府から民間へと変化していった。ドーチェスター総督やシムコ準総督のタウン・プランニングの多くが実現されなかったこともあり、個人の起業家や土地開発企業がタウンシップの全部や一部を買得し、タウン・プランニングを行うようになった。タウンシップを測量して開拓を進め、その中に町をつくることは、当時の起業家を志す移民にとって、大きな希望

の一つであった。起業家らが買得した町立て地の区画販売は、将来の成長を約束された場所としてカナダやアメリカ合衆国の新聞などで宣伝された。しかし、そのタウン・プランニングが「計画上の町」で終わり、実際の開発が行われなかったものもかなりあった。実際の開発が行われた初期カナダの主要な町は、それ以降の自然発生的な居住地に先立つカントリータウンとして、その後の中心地ネットワークにおける重要な場所となっていったのである。¹⁸⁾

また、町立て地内部の区画は、機能性を追及した方格プランが一般的であったが、この伝統を破る2つの町が、1827年のウエリントン郡のグエルフ (Guelph) と1829年のヒューロン湖岸のゴードリッチ (Goderich) である。どちらもイギリス系企業のカナダカンパニーが開発を行った。町の中心部は市場を中心とした放射状の道路パターンを採用し、中心部以外は方格プランを採用した。しかし後に続くほとんどすべての町は、後述のエローラ村も含め、以前の方格プランを採用した。¹⁹⁾

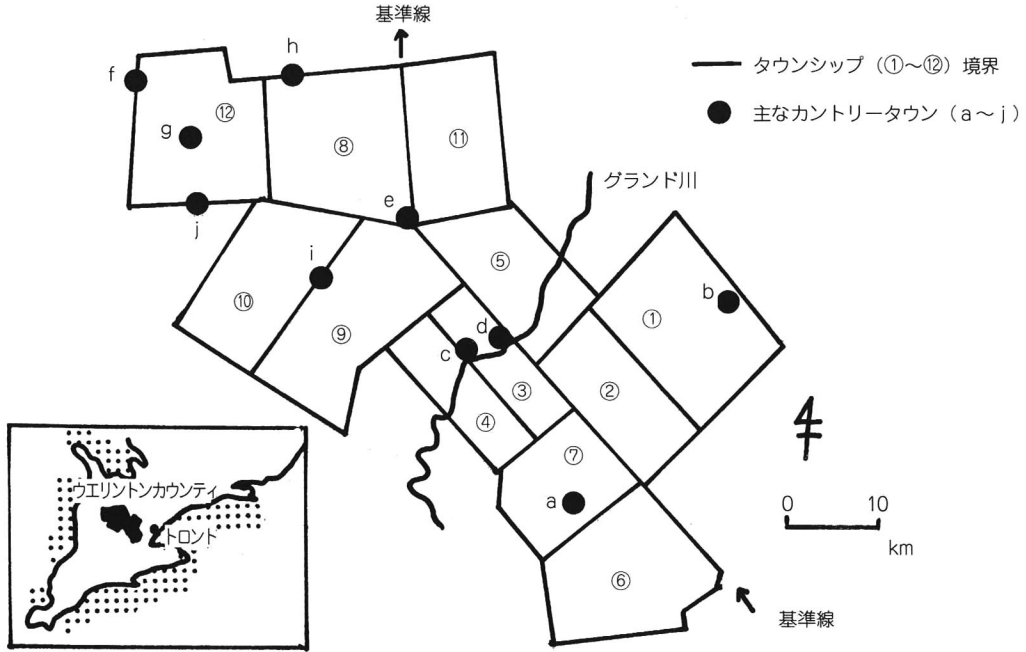
(3) ニコルタウンシップの開拓とエローラ村の計画 エローラ村のあるウエリントン郡の開拓は、アメリカ独立戦争後の1780年代に政府が先住民から買得した土地に入植者が入ることによって始まった。1792年にシムコ準総督の命令でオンタリオ湖から北西45度の方向の直線で途中から真北に向かう基準線がまず設定され、その基準線に接するタウンシップの測量が行われた²⁰⁾ (第2図)。ウエリントン郡では1798年と1818年に先住民から買得した土地が多く、1840年頃には王室保留地の売却も行われている (第1表)。こうして開拓は、オンタリオ湖岸から内陸部へ

17) 前掲7) pp. 32-34.

18) ①前掲7)。②Hodge, G., *Planning Canadian Communities*, Nelson Canada, 1989, pp. 45-47.

19) Stelter, G. A., "Combining Town and Country Planning in Upper Canada: William Gilkison and the Founding of Elora", *Historic Guelph*, 24, 1985, pp. 20-45.

20) ①Hutchinson, J. F., *The History of Wellington County*, Landsborough Printing, 1998, pp. 139-168. ②Beattie, D., *Pillars and Patches along the Pathway: a History of Nichol Township*, Vidette Printing, 1984, pp. 3-5, 93-99.



第2図 ウェリントン郡のタウンシップと主なカントリータウン

第1表 ウェリントン郡のタウンシップ設定

位置*	タウンシップ名	測量年	1850年人口(人)	備考
①	Erin	1819	3,035	1818年先住民より買得**
②	Eramosa	1819	2,050	1818年先住民より買得
③	Nichol (ニコル)	1819	2,098	1798年先住民より買得
④	Pilkington	1808	—***	1798年先住民より買得
⑤	West Garafraxa	1821	1,661	1818年先住民より買得
⑥	Puslinch	1827	3,361	
⑦	Guelph	1827	4,399	1829年カナダカンパニーに売却
⑧	Arthur	1841-42	1,449	一部, 1818年先住民より買得
⑨	Peel	1843	1,966	もと王室保留地 (Clergy Reserve)
⑩	Maryborough	1849	587	もと王室保留地 (Clergy Reserve)
⑪	West Luther	1854-55	—	1818年先住民より買得
⑫	Minto	1853	—	

* 位置番号は第2図に示したものである。

** 1818年の先住民 (Mississauga Indians) からの政府の土地購入は, 648,000エーカーにおよんだ。

***1852年以前は他のタウンシップの一部であったため, 人口数が不明である。

(資料) ① Seiling, K., "The Early Settlement of Wellington County", *Families*, 15-4, 1976, pp. 143-149.

② Hutchinson, J. F., *The History of Wellington County*, Landsborough Printing, 1998.

北西に進んでいった。

ニコルタウンシップの28,512エーカーは1798年に先住民から買得され、最初の土地区画がダブルフロントシステムで1819年に設定された。ニコルタウンシップの入植者は、数家族単位で開拓をすすめていき、1830年代から縦横の道路の交差点に集落が計画されていった。人口は、1829年の23人から1834年には134人となり、耕作地は181エーカーであり、馬・肉牛・乳牛・羊などの家畜も飼われていた。そして1837年の人口は、698人と急増した（第2表）。タウンシップ内の土地区画は、川の兩岸の二つの地域に分けられる。それぞれ異なる基準線から測量されたため、別方向の道路と区画をもち土地区画の不整合が見られる。

1832年夏、ニコルタウンシップの南西半分の14,000エーカーを、スコットランド出身のギルキソン（Captain William Gilkison）が購入した²¹⁾。彼は、1796年にスコットランドからアメリカのニューヨークに着き、各地を転々とする中でアッパーカナダの情報を得た。そして知人の投機的土地買得によるタウン・プランニングの成功を見るうちに、土地購入とタウン・プランニング²²⁾に心を動かされていった。南オンタリオ地域のタウン・プランニングには、ギルキソンのようなスコットランド出身の起業家たちが多くか

かわっていた。土地を購入したギルキソンは、北端の滝の近辺100エーカー前後の区画を町立て地として測量し、販売する計画をもっていた。こうしてグランド川（Grand River）の美しい滝のある場所が交通・景観の両面から重視され、エローラ村が計画されることになった。エローラという名前は、冒険一家出身のギルキソンらしく、インドのエローラ遺跡にちなんで名付けられたものであった。

ギルキソンは、町の計画や測量の経験をもつ者に、区画の測量をさせた。当初の計画では、グランド川の南岸を町立て地として測量した²³⁾。また、水車用導水路を開き土地の売却を管理する事務所や、製材所・製粉所の計画も指示した²⁴⁾。エローラ村の町区画は方格プランであったが、川の方向や周辺タウンシップの区画と整合するものではなく、周縁部は不規則な区画が見られた。また、将来町が川の南岸にさらに広がることを想定して、広場が町の中心からはずれたところに計画されるなど、独自性がみられる。

ギルキソンは、エローラ村を活気のあるコミュニティとして発展させることを考えた。そこで、町立て地と周辺の農地を明確に区別し、町立て地の区画は実際に居住する定住者だけに販売するために、投機目的の購入を断った。また、開拓者をひきつけるために教会の建設を最

第2表 ニコルタウンシップとエローラ村の人口変化

（単位：人）

	1834	1841	1845	1851	1861	1871	1881
ニコル TS	134	1,013	1,358	2,098	2,395	2,737	2,474
エローラ村	20	—	84	400	1,043	1,498	1,387

（資料） *Census of Canada (Population)* .

21) ギルキソンは、スコットランド出身のヨークの議員（Legislative Council）であるクラーク（Thomas Clark）とつながりがあり、この購入になった。クラークは1812年の第二次英米戦争後アッパーカナダの未開拓地を何万エーカーも購入した投機家でもあり、ニコルタウンシップも所有していた（一部を1826年に売却）。（①前掲19）。②前掲20）① pp. 185-209.）

22) 例えば、同じスコットランド出身のハミルトン（George Hamilton）が1816年にプランニングしたオンタリオ湖岸のハミルトン（Hamilton）は、この頃までに重要な町となっていた。（前掲19）。

23) Buswell, L., *Plan of the Village of Elora*, 1832. Wellington County Archives 所蔵地図。

24) 前掲19）。

初の計画にいたった。彼自身は熱心なキリスト教信者ではなかったが、タウン・プランニングに際しての教会の重要性を十分に認識し、8区画分の広場区画のうち、2区画を教会に割り当てた。スコットランド出身者を村の事業経営の管理者に選び、ゲルフ市からの道路の改良やタウンシップ道路建設に取り組ませた。また、北からのアクセスをよくするために滝のところを橋の建設も計画された²⁵⁾。

このように、エローラ村の開拓と計画のすべりだしは順調かに思えたが、1833年4月のギルキソンの突然の死で頓挫した。長男が事業を受け継いだか、区画販売は低調であった。この後、1844年までエローラ村はほとんど発展しなかった。その間、ニコルタウンシップ内における別の新しい町ファーガス (Fergus) の建設が、さらにエローラ村の発展を抑制した。カントリータウンの計画は、事業的野心をもった開拓者個人の資質と行動力に大きくゆだねられ、その運命も左右される。ただその後のエローラ村のたどった歴史を考えると、産業立地と景観の両面で、ギルキソンのグランド川岸のタウン・プランニングには先見の明があったといえる。

III カントリータウンの展開：1840～70年代

(1)カナダと周辺タウンシップの状況 1840年にイギリス議会でカナダ統合法が可決され、翌年にはアッパーカナダとローワーカナダが統合され、連合カナダ植民地が成立した。植民地政府は、1846年には自由貿易政策を採用し、帝國的支配から責任政府への移行がはじまっていた²⁶⁾。カナダ植民地は、毛皮交易・農業・漁業を基盤に発展し、植民地議会も設立された。19世紀中頃にかけて人口はアイルランドからの移

住者で急増し、アッパーカナダの人口は1842年から1851年の間に45.0万人から95.2万人に倍増した²⁷⁾。入植者は小麦の栽培を行い、そのほとんどはイギリスに向けて輸出された。アッパーカナダでは湖を利用した水上交通や町や村を結ぶ道路網がよく発達した。また、1850年当時のアッパーカナダでは、人口1,000人以上の町が38あった。そして、1867年にはイギリス帝国内の最初の自治領としてのカナダ連邦が結成されるのである。

この時期のニコルタウンシップ人口は、1840年初めに1,000人を越え、その後も増加し続ける(第2表)。また、エローラ村を含む1851年のニコルタウンシップ人口は2,498人で、出身地別にみると、スコットランドの980人が最も多く全体の39.2%を占める。そして、カナダが912人(36.5%)で続き、以下アイルランド304人(12.2%)、イングランド202人(8.1%)となる。また、同年のウエリントン郡人口26,796人の出身地は、カナダが11,694人(43.6%)、以下アイルランド5,638人(21.0%)、スコットランド4,884人(18.2%)、イングランド3,505人(13.1%)であることから、ニコルタウンシップのスコットランド出身者の多さが際立っている。ギルキソン以来のスコットランド出身者の活躍がみられる。1870年代にかけて人口はさらに増加し、土地区画や生活についての細則がつくられていった。

この頃のウエリントン郡は、オンタリオの平均よりも農業従事者の割合が高く、商業従事者の割合が低い。また開拓地率・農耕地率ともオンタリオの平均より高く、50～100エーカーの中規模土地所有者が半数以上である(第3表)。耕地では、小麦・大麦・エン麦・豆・ジャガイ

25) 前掲19)。

26) 前掲3) 73-77頁。

27) 林 上『カナダ経済の発展と地域』, 大明堂, 1999, 27-28頁。

28) ① Seiling, K., "The Early Settlement of Wellington County", *Families*, 15-4, 1976, pp. 143-149. ②前掲13)。

第3表 ウェリントン郡の人口・農地（1871）

①職業別人口					
（単位：％）					
	農 業	商 業	工 業	専 門	その他
ウェリントン郡	54.0	2.2	19.9	3.4	20.5
オンタリオ全体	49.3	6.3	20.3	3.6	20.5

②開拓地率・農耕地率と土地所有率								
（単位：％）								
	開拓地率	農耕地率	土 地 所有率	土地所有規模(エーカー*)				
				<10	10~50	50~100	100~200	>200
ウェリントン郡	58.6	24.3	85.6	8.4	17.7	50.6	20.3	2.9
オンタリオ全体	54.6	20.0	83.7	11.6	22.6	41.7	19.7	4.4

* 1 エーカーは約 4,047 m²

（資料） *Census of Canada (Population, Agriculture)*.

モが栽培され、肉牛・乳牛・馬といった家畜も多くなってきた²⁹⁾。ニコルタウンシップは、30年ほどで着実に開拓前線＝フロンティアからオンタリオの農業の中心地域へと変貌していった。

そしてこの開拓地域・農業地域をささえる中心地として、カントリータウンの役割が重要になっていった。ウェリントン郡内のカントリータウンは、早いところではエローラ村のように1830年頃から測量が始まった。また、1850年代に測量が始まったところや、製材所や商店などの施設がつくられていったところも多い（第4表）。カントリータウンにやってくる定住者は、タウンシップの農業開拓者たちへのサービス供給にかかわる仕事や、製材所や製粉所といった立地を生かした事業や商売をすることを目的に定住することを選択したのである。

（2）企業家の定着と産業の発展 ギルキソンの死後停滞していたエローラ村を復興させたのは、企業家アラン（Charles Allan）によるところが大きい³⁰⁾。スコットランド生まれの彼は、1833年にカナダへやってきた。トロント到着後ナイアガラへ行き、そこでの人脈から目的地向

ニコルタウンシップにした。彼はニコルタウンシップ内の他のカントリータウンで、教会・ダム・製材所などの建設に携わった。1842年のニコルタウンシップの第1回の地区議員選挙に立候補するが、惜しくも落選した。その選挙後、アランはエローラ村にやって来て会社を設立し、土地を購入し、製粉所や店を建てた。1843年に製粉所と製材所が操業を開始すると、彼の存在が多く企業家をエローラ村にひきつけた。彼に刺激された人物は、川の南端に梳毛所を建設した。また、1849年にエローラに馬具職人としてやってきた人物は、1860年代にはホテル経営まで手掛けるようになった。1850年代になると、アランは工場や店を売却し、土地投機にかかわるようになった。そして地区議員、郡会議長、州議員をつとめ、1859年に死去した。

アランの入植以降、エローラ村の商業活動は活発になっていった。アランが売却した会社も他の経営者に引き継がれて発展していった。1846年のエローラ村には、16の商店や工場が存在し、製粉所・製材所・蒸留所などが川の近辺に立地した。1851～52年になると、事業は50に

29) Smith, W. H., *Canada Past, Present, and Future*, Mika Publishing, 1974, (originally published in 1852) pp. 90-128.

30) Cannon, J., *Elora — The Early History of Elora and Vicinity*, Wilfrid Laurier University Press, 1930, pp. 119-121.

第4表 ウェリントン郡の主なカントリータウン

位置*	カントリータウン名	町としての始まりと内容	1881年人口(人)**
a	Guelph	1827年 Galt (カナダカンパニー) が町立地の計画	9,890
b	Erin	1829年 McMillan が製材所購入	—
c	Elora (エローラ)	1832年 Gilkison が土地購入, 測量, 製材所・製粉所の計画	1,387
d	Fergus	1833年 Fergusson が土地購入, 教会・学校・製材所の建設	1,773
e	Arthur	1841年 McDonald, 46年 Papineau が測量, 町区画の設計	1,257
f	Clifford	1850年 Brown が土地取得, 測量, ホテル・郵便局等建設	722
g	Harriston	1853年 Harrison 四兄弟が, 商店, ダム, 製材所を建設	1,772
h	Mt. Forest	1853年 Kerr が取得, 王室地の販売へ	2,170
i	Drayton	1860年測量, 1870年代の鉄道により町の発展へ	587
j	Palmesston	1871年鉄道駅建設, 土地所有者が町区画の販売開始	1,828

* 位置記号は, 第2図に示したものである。

**1881年以前の人口は, 独立した自治体であったカントリータウンが少なく不明のところが多いため, 1881年人口を示した。(資料) ① Hutchinson, J. F., *The History of Wellington County*, Landsborough Printing, 1998.

② *Census of Canada Population 1881*.

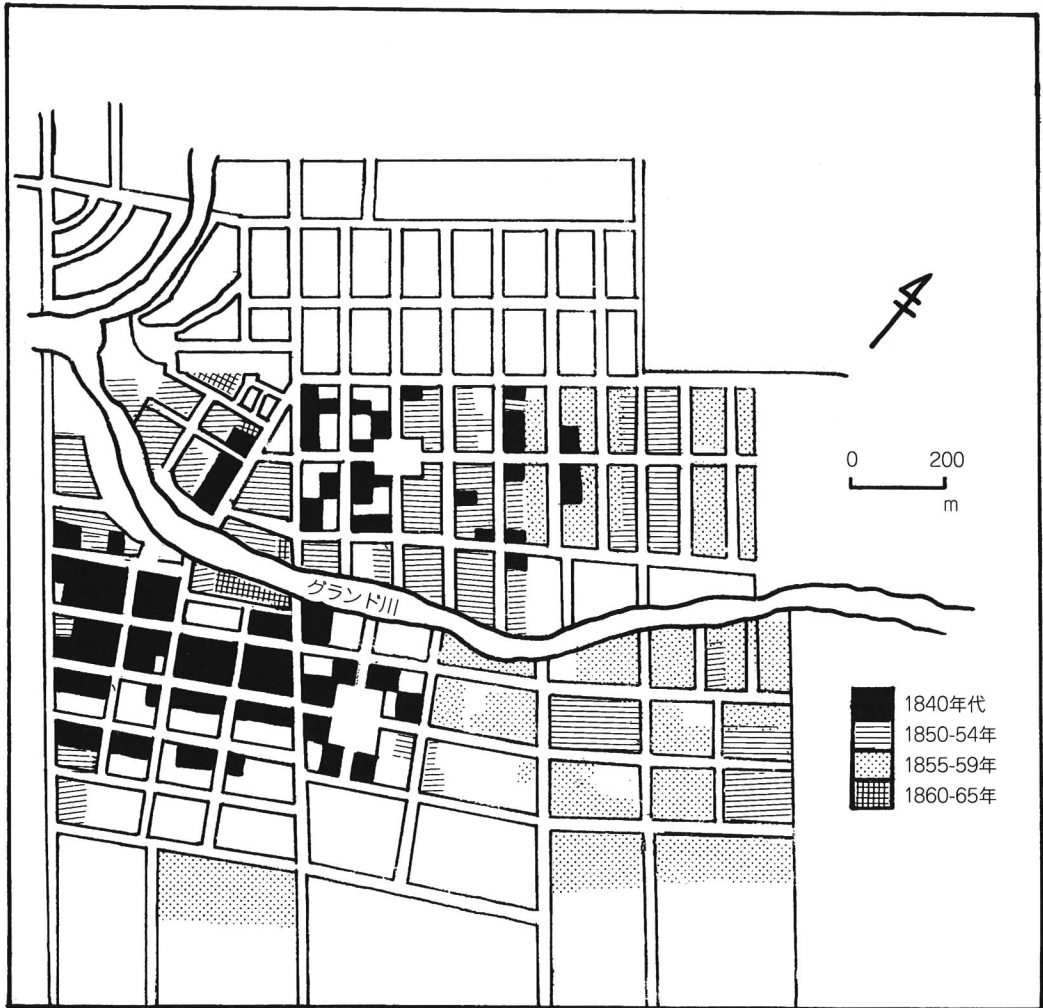
増加した。³¹⁾ 1852年からは半年に1回, そして1859年以降は月1回に家畜の市が開かれるようになり, 家畜はトロントなどのカナダの都市やアメリカ合衆国やヨーロッパへ出荷された。また, 雑貨屋や鍛冶屋といった日用品や農具を販売する商店も多くでき, 周辺農業地帯の集積地・中心地としての役割が大きくなっていった。そしてエローラ村は, 1857年にはニコルタウンシップから独立した自治体となるのである。また企業家たちは, 鉄道の誘致も熱心にすすめた。鉄道誘致が本格化するのは1870年代に入ってからで, 1870年と1879年に2本の鉄道路線が誘致され, エローラ村は州の主要都市域と結ばれ広大な市場と後背地を獲得した。このように, 1860~70年代にかけて商店や工場, 事業所の数は着実に増加し, 1870年代には8つのホテルもつくられ, 中心地としての機能が充実していった。³²⁾

(3)人口の動向と市街地計画の展開 産業の発展期である1840~70年代にかけては, 人口増加も著しい(第2表)。特に1850年代には人口が2倍以上増加し, 1861年には1,000人を超えた。居住者の出身地は, 前述のようにスコットランド出身者が多いのが特徴であるが, 次第に移住の安定期を迎えて世代交代もすすんだことや, カナダの他地域からの移住も増え, 1870年代になるとカナダ出身者が65%を占めるようになった。この時期の人口増加には, 1841年に建設された道路の影響も大きい。道路建設による交通アクセスの発展は, 1850年代にグエルフからエローラ・ファergus地域への町立て地区画の測量と投機・販売のブームをおこし, 入植者の増加をもたらし³³⁾た。エローラ村の人口増加時期は, ウェリントン郡のカントリータウンの中で早い方であったが, エローラ村はあくまでも周辺農業地帯の中心地を志向した。そのため, おくれ

31) ① Smith, W. H., *Smith's Canadian Gazetteer*, H. & W. Rowsell, 1846. ② Mackay, R. W., *Canada Directory*, Montreal, 1851-1852. ③ Dun and Bradstreet of Canada Ltd., *Reference Book*, Toronto, 1864-1881.

32) ①前掲20) ① pp. 185-209. ② Dahms, F. A., "The Evolution of Settlement Systems: A Canadian Example, 1851-1970", Stelter, G. A. ed., *Cities and Urbanization - Canadian Historical Perspectives*, 1990, Copp Clark Pitman Ltd., pp. 177-207.

33) 前掲20) ① pp. 153.



第3図 エローラ村の住宅地開発 (1840~60年代)

資料 : Registry Office of Wellington County 所蔵の *Register of County of Wellington* (1866) の "Date of Registry" より作成。

て建設されたが工業を軸とした隣町のファーガスに人口は追い越された。その後の道路建設もエローラ村の経済を刺激はしたが、オンタリオ湖とヒューロン湖を結ぶ主要南北道路には接合しなかったため、トロントを中心とする都市化の波からはたちおくれていくことになった。

この人口増加期のエローラ村内部の市街地計

画、住宅地や商工業地の開発の実態をみていきたい。登記簿の日付を手掛かりに住宅地の開発状況を知ることができる³⁴⁾(第3図)。また、当時の地図類からも開発の計画や状況を読み取ることができる。1840年代は、グランド川の南側に沿った宅地が多く登記されている。1845年の地図では、川の両岸に区画が見られるが実際に建

34) ① Fordyce, A. D., *Plan of the Township of Nichol* (*Plan of the Village of Elora* を含む), 1845, (C277-1-306-01). ② Macintosh, J., *Plan of a part of the Town of Elora*, 1853, (C295-1-45-01). ③ Kertland, Percival and Macintosh, *Town of Elora*, 1855, (C295-1-45-02). 以上①~③, Ontario Archives 所蔵地図。④ Cotterell, A. T., "Elora, drawn and compiled from registered plans", Cumming, R. ed., *Illustrated Atlas of County of Wellington* (1877), 1972, pp. 50.

物があるのは南側だけである。川の北側の東よりに登記されている宅地は、1840年代後半のものであると考えられる。1848年には、主要道路上にあることや美しい滝と峡谷があることを宣伝文句に200区画の売り出しが行われ、宅地販売が本格化した。そして1850年代になると、川沿いの通りに工場や店などが建設され、商工業地区が川の南側から北側へ移っていった。1850年代の地図では、川の北側では方格状の小区画が多くみられる開発が進んでいるのに対し、南側は大きい区画のままである。北側が商業地・住宅地として急速に発達していったことがうかがえる。1850年代の宅地登記でもそれが裏付けられ、住宅地は川に沿って長く広がっている。また、川のすぐ北側の三本の通りに囲まれた三角地帯が商工業地区となった。川の南側では、将来の開発に備えた保留地の一部がすでに住宅開発されており、最初の計画と開拓の現状との間に乖離がみられる。北側では、登記されている区画のさらに北側に新しい住宅地用区画がみられる。なお、村の北西部の同心円状の土地区画は、計画地図上には早くからみられるが、実際の入植はもっと後になってからである。また、村の南東部の区画にも広場を中心とする曲線をもつ土地区画がみられる計画地図もあるが、実際の入植は見られない。そしてこの部分は入植も進まず、当初の計画が実現することはなかった。

またこの時期、教会や学校などのコミュニティ施設も充実してきた³⁵⁾。1840年代から丸太小屋の学校等は存在したが、1860年代に入り学校建設が盛んになった。教会の活動も入植と同時期から行われていたが、石造りの教会が建てられたのはやはり1860年代に入ってからである。英国国教会派の他、さまざまな宗派の教会が建てられた。郵便局や簡易図書館が1840年頃からで

き、その他にも地方新聞も発行されるなど、1860～70年代はコミュニティとしての成熟がみられる。また、アメリカ南北戦争時にはカナダでも軍事的緊張が高まった。反英感情を持つアイルランド系アメリカ人グループのカナダへの不法侵入の恐れもあり、カナダの多くの町や村でドリル・シェッドとよばれる在郷軍を訓練する場所がつけられた。エローラ村でも1865年に設けられた。

IV 19世紀カントリータウンの評価

小稿では南オンタリオの1つのカントリータウンの計画から1870年代までの産業の発達と土地開発の過程をみた。イギリス領北アメリカ植民地期から自治領としてのカナダ連邦が結成される時期のカナダの開拓は、当初はイギリス帝国の植民地政策の要素が非常に強かったが、次第に私的・投機的な開発が中心となっていった。特に19世紀初頭から開拓が始まった事例地域では、設定されたタウンシップを投機的商業的な動機から買い取った起業家によってタウン・プランニングが始まり、製材所などを経営する企業家によって産業が発展していった。カントリータウンは、カナダ国家にとっての開拓前線＝フロンティアであり、最初の開拓者にとっては町経営の夢を実現する舞台であった。エローラ村の計画と最初の展開は、ギルキソンのように土地を購入し測量・計画を行った起業家や、アランのように産業を興し町を活性化していった数人の企業家個人の影響に負うところが非常に大きかった。また、スコットランド出身者の活躍や成功が目立った。その後のカントリータウンの開発・展開は、必ずしも最初の計画が実践されたわけではないが、周辺タウンシップの開発とも深くかかわりあいながら、ビジネスチャンスをねらう定住者が増加し、工業・商業活動

35) 前掲13) ②。

が活発になっていった。それにつれて、周辺タウンシップの農業従事者にとって、そのサービスセンターとしての役割も大きくなっていった。このようなカントリータウンの機能の充実の中で、町はいつしか個人の手から離れ、居住者全体のコミュニティを形成するようになっていった。

タウンシップやカントリータウンへの入植とその開発が一段落する時期に、一方では産業革命・都市化の影響を受け、もう一方ではカナダの大陸国家を目指す西部開拓の影響を受け、アッパーカナダのカントリータウンは人口減少・経済機能の衰退などの現象が見られるようになる。1870年代以降のカナダは、大陸を横断する版図を完成しアメリカの脅威からも解放され、より自律的な国家建設を模索しはじめる³⁶⁾。幹線道路の確保と移民誘致で西部の農業生産を向上させるという目的の中で、ケベック州やオンタリオ州³⁷⁾はそれを支える製造業の発展という新たな役割が期待されるようになった。そして同時期、南オンタリオの農業そのものも転換期を迎えた。小麦の生産とその輸出で大いに発展した南オンタリオの農村では、1880年代に入っても小麦生産が盛んに行われていた。しかし開発の段階はすでに終わっており、小麦価格の低下、農作物の疫病、生産性の低下により、新しい農業への転換が模索されるようになる。そして、新しい灌漑方法の考案や家畜の品種改良と共に、クリーム分離機などが発明され³⁸⁾、集約的な混合農業地帯へとようになっていくのである。

そのようなカナダの国家的戦略および経済動向と南オンタリオが置かれていた現実の中、ニコルタウンシップ、エローラ村とも人口のピー

クは1871年で、それ以降は人口の減少期に入る。ウエリントン郡全体のピークは1881年で、郡内のカントリータウン人口のピークが1891年である。1885年に大陸横断鉄道が実現し、カナダの西部開拓が本格化する頃から、南オンタリオのカントリーサイドとカントリータウンは都市化と農業の大規模機械化の影響を受け、人口が減少し、カントリータウンのメインストリートの経済機能も衰退していく停滞期が1950年頃まで続いていく³⁹⁾。

1970年代以降にはカントリーサイドは新たな局面を迎え、人口減少が続いた多くのカントリータウンでの人口増加、環境の再評価がみられるようになる。これは、多くのカントリータウンが19世紀末から20世紀初頭にかけての都市化の波に組み込まれることがなく、その環境や雰囲気³⁹⁾が保たれたことが大きい。また、以上で見た19世紀の立地条件とプランニングが評価されているようである。カントリータウンの変わらない住宅地やメインストリートの雰囲気、明確な境界線をもつコンパクトなコミュニティとしての存在感、周辺の田園環境や風光明媚な自然環境が分散的な都市的生活様式も備えた空間形成の要素となっているようである。小稿で示したエローラ村の計画と展開は、アッパーカナダにおける、19世紀初期に起業家主導でタウン・プランニングされ、19世紀中期に発展したカントリータウンの好例といえる。

【付記】 ご指導いただきました金田章裕先生（京都大学）に感謝いたします。本研究には、平成11年度科学研究費補助金（奨励研究(B)課題番号：11910006）を使用しました。

（同志社女子中学・高等学校）

36) 前掲3) 115-133頁。

37) 1867年のカナダ連邦結成によるカナダ自治領の誕生で、旧アッパーカナダはオンタリオ州、旧ローワーカナダはケベック州となった。

38) 前掲27) 63頁。

39) 前掲2)。

Planning and Development of Canadian Country Towns in the Nineteenth Century: A Case Study of Elora Village, Upper Canada

Mitsuko TANIGUCHI

Doshisha Girls' Junior and Senior High School

Country towns are small settlements which are scattered over the rural area. Many country towns were planned and located with specific functions, especially as a basis for pioneer settlement. These towns often preceded general settlement and developed a tradition as rural service centers. In Upper Canada, in the 1780s, the British Imperial Government began a land survey and town planning along the St. Lawrence River and Lake Ontario to encourage settlement.

The purpose of this paper is to reveal the process of formation of country towns: who had the idea of town planning, how the plan was realized and developed, and what changes the country town has undergone. The process will be assessed in the context of Canadian pioneer experience in the nineteenth century. The village of Elora in Wellington County was chosen as a typical country town in Upper Canada. It is situated in the middle of Southern Ontario, and its planning and development started in the 1830s when the development of Southern Ontario began in earnest. The following approaches were taken to examine and assess the sample village.

Firstly, the general planning of Upper Canada is discussed. The Imperial government purchased the land from the indigenous people and granted it to new settlers. The administrators ordered a systematic land survey, the basic unit for which was the township. Simcoe, Lieutenant Governor of Upper Canada in 1792, ordered the survey of Southern Ontario from the shoreline of Lake Erie and Lake Ontario. Many townships were set up using several survey systems which included the rectangular land system. Simcoe thought that choosing a site with natural advantages was the most important thing in town planning. The lots in the townsite were usually based on the rectangular land system.

Secondly, the planning of Elora is discussed. In Wellington County, Simcoe ordered that the base line start from Lake Ontario, and townships adjacent to the lines were surveyed. Nichol Township was purchased in 1798 and the lots were set up using the double front survey system in 1819. Gilkison, from Scotland, purchased half of the south-west portion of Nichol Township and chose the site for his town of Elora at the beautiful falls on the Grand River in 1832. He organized the survey and layout for the village.

Thirdly, the development of Elora between the 1840s and 1870s is discussed. The village had been in decline for years after the death of Gilkison. However, under the direction of Allan, and with the co-operation of the residents, Elora was revitalized with some manufacturing establishments, and there was a steady increase in population. As the surrounding townships were settled, Elora became a rural service center. The data of the register and some maps show the realities of town planning at that time. The north side of the Grand River was developed rapidly as a residential area, and there was also a commercial and an industrial area. They reveal the difference between the original plan and the realities of frontier settlements.

From these three approaches, the results can be summarized as follows: at the beginning, the work of the land survey and the planning of towns was carried out by Imperial officials as the main colonial policy, but gradually private entrepreneurs became interested and the work became more speculative and ambitious. The planning and development of Elora is a typical example of the latter, undertaken by some private entrepreneurs, such as Gilkison and Allan. As the number of settlers and businesses increased, country towns developed quite differently from the original plan.

By the 1860s, most of the available land in Wellington County had been taken up. The population of Nichol township and Elora village peaked in 1871, but since then there has been a steady decrease until 1941. The countryside and country towns in Upper Canada were influenced by urbanization and the mechanization of agriculture on the one hand, and the enthusiasm of pioneering in the Canadian West, on the other. The village of Elora provides a good example of country towns which were planned by private entrepreneurs in the nineteenth century.

Key words: country town, Upper Canada, town planning, township planning